北尾次郎周辺から見た『舞姫』成立過程

～鷗外『舞姫』主人公モデルとしての北尾次郎と『東亜 Ost-Asien』掲載・独語版『舞姫』から見た「亜瓦船中稿」存在可能性について～

広瀬　毅彦

はじめに

北尾次郎（一八五六～一九〇七）についてお話をすると、決まって「北尾次郎と森鷗外とはどういう関係だったのですか」と尋ねられる。

やや年齢は違うものの、両者は同じ島根県の出身であり、ベルリンとも縁が深いことから、まずは鷗外と比較してみたい気持ちになられるのであろう。

北尾次郎は、三宅雪嶺によって、明治第一の天才と賞賛され、東大教授として、物理学、森林物理学、気象学等を講義した。その一方で、約一四年間にもわたる、一四歳からのベルリン長期留学を経験し、ドイツ語には堪能、ゲーテの作品よりも長編だといわれる小説を、ひとり黙々とドイツ語で書き綴っていった。日本語ではなく、いきなりドイツ語で、それも物理学や気象学の研究の傍ら長編小説を書けたという点一つからでも、大天才であったことは容易に想像が付く。

そこで本稿では、この二人の明らかにされていない関係とその周辺を、主として北尾次郎の側に光を当てる形から筆を進めることとした。

検証すべき問題点としては、

①北尾次郎と森鷗外が共にドイツ語だけで書かれた文藝雑誌"Von West nach Ost"（日本語タイトル『東漸雑誌』）の編集をしていた時期が存在し、それがちょうど『舞姫』執筆時期と重なることからも、森鷗外が北尾次郎を主人公「太田豊太郎」のモデルの一人として参考にしていた可能性があり、従来「太田豊太郎」のモデルとされてきた他の人物の経歴などと比較し、

②鷗外研究者・長谷川泉が書き残していた、一八九〇年一月に『国民之友』で発表された初版より以前に、帰国の際のフランス船 Ava 号船中で認めた「亜瓦船中稿」が存在するのではないか?との仮説を検証しつつ、

③ベルリンで出版されていた月刊雑誌『東亜 Ost-Asien』に一九〇八年から連載された、ドイツ語版『舞姫』（宇佐美濃守訳）こそが、実は翻訳ではなく、鷗外が『国民之友』発表に先立ち、ドイツ語で執筆し、関係者だけに配布した私家版ではなかったか、との可能性に触れる筆者説の根拠を示し、

④『舞姫』を鷗外が執筆した理由について、当時の北尾次郎一家周辺との関係の中から考え、

⑤北尾次郎の絵画作品を含め、北尾次郎が森鷗外に与えた影響を考察する。

『舞姫』に特徴的な現象としては、作中登場するヒロイン、「エリス」のモデルが何者だったのかを巡って、国文学者以外にも幅広い分野からの興味関心を集め、膨大な数の著作が公表されて続けてきていることである。

これに対し、小説の主人公である「太田豊太郎」については、モデル探しへの関心は集まらなかった。例えば、長谷川泉、平井孝、ベアーテ・ヴォンデが、鷗外と同時期にドイツへ私費留学した、軍医・武嶋務をモデルの一人と考える研究を発表している程度であった。

一般的には、森鷗外自身が主人公太田のモデルであると考えられがちで、その前提で映画化もされ、作品読解上でも、当然の如く鷗外その人の事件と解されがちになり、作中の主人公のみならず、作家鷗外への批判や非難、誤解の原因ともなっている現象を知り、微力ながらも本稿を著すことにした。

従って、本稿は、はじめから鷗外論ではなく、あくまで北尾次郎研究の延長線上にあることをお断りしておきたい。北尾次郎を通してみれば、別の『舞姫』解釈の可能性が見えてくるのではないか？

あくまで、北尾次郎の業績を考察、評価するための視点の一つとして、森鷗外との比較を試みるなかで得た見解との前提でご覧いただきたく思う。

本研究は、西脇宏島根大学教授を座長とする、「北尾次郎ルネサンスプロジェクト」として、科研費補助を受けたものである。ここに島根大学をはじめとする関係者各位への謝意を表明したい。なお、敬称は略させて頂いた。

北尾次郎作・自伝的メルヘン『愚かなミヒェル』と森鷗外

北尾次郎が森鷗外と一緒に、ドイツ語だけで書かれた文藝誌を出版していたことは、西脇宏によって詳しく紹介されているが、一方で、森鷗外の研究者からは、北尾次郎の存在は全く顧みられないままである。

『東漸雑誌』（"Von West nach Ost"）とは、一八八九年一月（明治二二）から翌年まで刊行されていたとみられる、獨逸文雑誌會発行のドイツ語雑誌であった。最終号の号数、発行日などは現物が発見されないので不明である。

この雑誌が注目されていたのは、鷗外研究者たちが、鷗外がこれに寄稿していたにもかかわらず、どこにも残っていなかったため、長年幻の雑誌と言われてきたこともある。しかしそれが一九九五年に国立国会図書館の未整理雑誌の中から発見され、最初の三号分だけが姿を現した。

なお、筆者が今回の調査で、ハンブルグ大学アジアアフリカインスティテュート図書室に一八八九年と翌九〇年の計二年度分の所蔵が OPAC に表示されるため、直接訪問し閲覧請求をしたが、Signatur(図書整理番号)が振られておらず、担当者からも考え得る限りの調査はしていただけたものの、そもそも図書管理上、Signatur がないままに、OPAC に登録された経緯そのものが前代未聞とのことで、行方不明である。（ベルリン州立図書館に、日本の国会図書館所蔵の一・二・三号分のコピー本が入っていることから、同様のコピー本をハンブルグでも登録しかけて、コピーと知り、中途半端に終わった可能性を指摘された。）このため、継続調査依頼中で、万一発見されれば、連絡が来る手はずになっているが、本稿脱稿時点までには依然所蔵不明のままである。小堀桂一郎は、「森鷗外『日本文学の新趨勢』について」（『明星大学研究紀要　日本文化学部言語文化学科』第四号、一九九六年）のなかで、この雑誌に収録されていたことで初めて発見された、やはりドイツ語で書かれた鷗外の文学論文について論評している。残念ながら北尾次郎については全く言及はされていなかった。

しかし、西脇宏の「北尾次郎『おろかなミヒェル』について」（『島大言語文化』第五号、一九九八年）で、このドイツ語雑誌に投稿していた北尾次郎の役割を始めて紹介された。と同時に、北尾次郎がペンネームで執筆していた、ドイツ語の小説について要約を掲載しておられる。

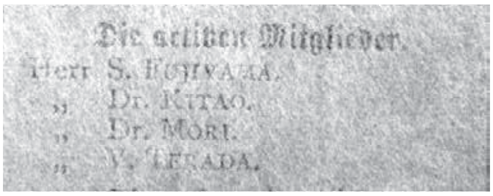
ドイツ語の雑誌名である、"Von West nach Ost"とは、直訳すれば、「西から東へ」となる。

西学東漸の意味で、『東漸雑誌』とも称されてきた。鷗外自身も「東漸雑誌に就きて巖々生に言ふ」（一八八九）でこの名称を用いていた。苦木虎雄『鷗外研究年表』二四六頁以下には、当時の広告から『東漸新誌』と称されていたと指摘されている。

「東漸」の前には、「西から、西欧の学問が」の意がついていることを暗黙の前提としなければ、正確な発刊の意図はわからない。

例えば、第三号にはまず森林太郎の「日本文学の新しい傾向について」が登場し、続いて北尾次郎のペンネームであるアナタール・シュームリヒによる「おろかなミヒェル(1)」や、再び森林太郎の「日本人の住宅についての民俗学的衛生学的研究(3)」が登場する。また第一・二号では、北尾次郎の名前を出して「スペクトル分析について」なる物理学講話も掲載されている。

Die Aktiven Mitglieder「活動会員」とし、S.Fujiwara,Dr.Kitao,Dr.Mori,Y.Teradaの四名の名前が載っている。（藤山治一、北尾次郎、森鷗外、寺田勇吉）


Die activen Mitglieder.
Herr S. Fujivara.
„ Dr. Kitao.
„ Dr. Mori.
„ Y. Terada.

事実上、この四人が編集委員であったことを示していた。ただ、国会図書館所蔵版の印刷文字が薄く、特に、Dr.KitaoのKが読みにくい。原本を直接撮影した写真を示すが、かなり画像補正を要した。

表紙画は三号とも、北尾次郎が描いており、その横には彼のサインも二ヶ所書かれている。

左側に、ギリシャ神話を想起させられるような構図があり、右側には富士山が描かれた日本がある。どちら側からも、裸体の西洋人女性がお互いを見つめ合っており、真ん中にはプロイセンの鷲の紋章のような鳥が、菊の紋章の腹巻きをして桜花と日の丸の上に鷲が翼を広げている、一風変わった絵だ。が、その絵の意味するところは、実に明快である。

西洋から技術や文化、文学を学び、これが日本に移植される。政治体制までもが、あの北尾次郎邸食堂の幻の王冠と同じで、プロイセンのシンボルに、日本の皇室の象徴を着せ、国旗や花は日本のものを使用している。

ああ和魂洋才のことか、と読者の方はすぐ連想されるであろうが、まだ明治二二年で、鹿鳴館の熱気が残る時代であることから、どうやらもっとプロイセン寄りのイメージと見える。

日本人の手で編集し、ドイツ語だけで執筆し発行しようというのである。北尾次郎は、当時盛んになりつつあった、ローマ字運動にも参加し熱心であったので、現代の我々が抱くよりも、大胆に西洋式に改めようとの欧化政策のもと、編集された雑誌とも考えられる。

この年、大日本帝国憲法が発布され、北尾次郎も、既にプロイセン憲法起源史に関する書物を出版していた。彼自身、憲法調査にベルリンを訪れた宗教人を、ドイツ留学中にオーストリアに案内する等しており、物理学者の枠にとどまらない、法制史学者としての関心も強かった時期である。

日本がようやく、西欧列強諸国並に立憲君主制をとり、不平等条約改定のためのスタート地点についた時代であったので、森鷗外も北尾次郎も、新時代への、やや過剰な期待をもって興奮していたであろうことは、この雑誌からもうかがい知ることができる。ドイツ語雑誌を日本で発刊することは、ドイツ知識人へ対しても格好の日本紹介になるはずであった。

『東漸雑誌』刊行は、一八八九年一月で、鷗外の『舞姫』が『国民之友』一八九〇年一月三日発行新年号附録に発表されるちょうど一年前であった。また、北尾次郎邸が竣工する一八九二年からみれば、三年前の話になる。

以後、約二年間、森鷗外と北尾次郎は、編集委員として『東漸雑誌』を介して交流していたことになり、何より森鷗外が、北尾次郎をパートナーとして選んでいたことが、意外であろう。

北尾次郎はドイツ語の長編小説を書いていたとはいえ、職業的小説家ではなかった。鷗外の日記類を見ても、北尾次郎に関する記述は見当たらない。にもかかわらず、北尾次郎に多くのページを託したということは、これが鷗外の編集方針でもあったことになる。

当時の鷗外は、一八八八年九月に、四年間のドイツ留学を無事終えて帰国した直後であり、翌年一月、読売新聞に『小説論』（後に『医学の説より出でたる小説論』として、文藝評論集『月草』収録）を執筆し、当時の坪内逍遥を暗に批判し、小堀前掲論文八頁によれば、「逍遥の厳密な写実一点張りに対する、空想・夢想の復権を説いた立論であったことは明白だった」とされる。

また、北尾次郎自身も大量の裸体画を描いており、鷗外も裸体画論争においては、読売新聞に擁護論を発表していた。北尾次郎とも美的意識の上で共通の関心があったことが窺える。

クンストメルヘン作家としての北尾次郎

それにしても、各方面で意欲的に文学論を戦わせてきていた鷗外が、何故、北尾次郎と雑誌を出すことになったのか？　残念ながら、森鷗外は北尾次郎については一言も書き残してはいない、北尾次郎もまた然りである。

それには、やはりこの小説を読んでみなければわからない。

この小説は、現在国立国会図書館にある雑誌の原本では、初回分までの連載しかなく、その後は雑誌自体がいまだに未発見である。

しかし西脇宏によると、その約十年後に出版された『獨逸語学雑誌』という、ドイツ語学習者のための雑誌に、全文連載されていた。（どちらにしても、全文和訳されたものはないので、ご興味のある方は、『島大言語文化』掲載の

前掲論文に要約が載っているので、ぜひそちらをご覧頂きたい。）

冒頭「メルヘンの形式をとったある人生観」と副題がつけられて、まずこう書き始められる。

「馬鹿者の住む村（デュンメルハウゼン）がどこにあるか、君は知っているかい？」

この封建的で、閉鎖的なドイツのどこかの村に、生まれた時から口もほとんどきけず、感情のない少年、ミヒェルは、村人から馬鹿にされ、「魂のない子ども」と蔑まれていた。

両親を失い、ひとりぼっちになってしまい、全く口をきかなくなった彼の前に、子供の頃よく見た夢の中の綺麗な女性が現れ、悪霊の呪いをかけられているこの女性を解放するために、本当の魂を手に入れる旅に出かける。目指す魂は、寒気や炎熱地獄、砂漠を通りぬけ、その先の不思議な城にあると聞き、困難を乗り越えながら探し歩く。

それぞれの城には入口に「高潔」「慎み深さ」「美」などの言葉が書かれており、多くの悪魔との戦いや試練を乗り越えて、やがて魔法の城の女王の娘を手に入れる。彼が欲しかった「小さな魂」とは、この女性のことだった。

しかし馬鹿な村人にとっては、旅から戻ってきたミヒェルが連れてきたよそ者の女は、仕事は出来ず、小柄で、役に立たない。やがて二人の間には、金髪の王子が生まれる。ミヒェルの家は荒れ果てて、崩壊寸前に見えたし、相変わらず貧しいものと思われていたが、グリム童話に出てくる、食べ物を用意せよ、と言えば、すぐに望みが叶うような、魔法のテーブルを嫁入り道具に持ってきていたので、実際に生活に困ることは全くなかった。それでも村人からはばかにされ、忘れ去られたまま、ミヒェルと美しい王女の一家は、「おそらく今この時間にも」まだその小さな荒ら家（あばらや）で暮らしているかもしれない・・・・・

北尾次郎本人が書いているように、なるほどメルヘンの形式をとっているが、これは半分、北尾次郎のそれまでの半生を描いてもいるのであろう。

幼少時代から、抜群の記憶力と頭脳を持ちながら、これを使って要領よく世の中を渡ることを全くせずに来たあたりは、まさに作中の主人公とも重なり合う。

天才にありがちな偏見、しばしば変わり者扱いをされ、時には馬鹿にされることもあったに違いない。が、彼は、科学的にも、哲学的にも、文学的にも、何かの真理を得ようとした。

日本の民話とは違う、大人向けのドイツ風創作メルヘンだけあって、高潔、慎み深さ、美といった、聖書に出てくるような、抽象的道徳では本当の魂の解放はなく、ミヒェルは、自らを試される幾つも試練を乗り越えていく大切さを教えられる。最後にたどり着いた満足も、実は周囲の村人には全く理解されず、また外から見えるものでもなかった。

出来たのは男の子たった一人で、本当は王女との間の王子様なのだが、住む家は、村はずれのボロ家でしかない。

現世の不条理が前提であり、そこにはある種の達観を要求されている。

それでも一家は永遠の命を得たのだろうか、今もまだひょっとするとこの家に住んでいるかもしれない、と最後には、メルヘンと現実の境界線までもが、ふっと消えてしまう。読みようによっては、極めて現代的でもある。

おそらくここに出てくる王女とは、北尾次郎の妻をさし、王子は長男・富烈（フレッツ）。荒ら家は、東信濃町にまさに設計計画中だった、自邸をイメージしたものであったろう。（富烈とはドイツ語の「フリッツ」であり、実際に、北尾次郎から息子宛の手紙はドイツ語でFritzとなっていて、鷗外の次男・不律と

もドイツ名では同じになる。）

森鷗外は、この日本人がドイツ語で執筆したメルヘンに興味を持ち、小堀のいう「空想・夢想の復権」の事例として、北尾次郎の作品を取上げたのではなかろうか。

日本人でも、北尾次郎のようにドイツ語で、メルヘン作品が書けるのだ、しかも実は立派な大人向けの読み物なのである、とさぞや誇らしくも思ったことであろう。現代の我々から見ると、小説やアニメ、映画の世界では、メルヘンやファンタジーがあふれかえり、ごくありふれた日常となっているが、明治初期においては、事情が異なっていた。

ここで北尾次郎が「メルヘン形式をとる」と冒頭わざわざ断ったのは、グリム兄弟が収集したような、民間に口承されてきた民話（フォルクスメルヘン）としてではなく、創作メルヘン（クンストメルヘン）であって、新たに作家によって作られることにこそ意味があった。

森鷗外が、北尾次郎を評価したのも、日本人の手によるクンストメルヘンの嚆矢としての位置付けであったのだろう。

たとえば、ゴットホルト・エフライム・レッシングの有名な作品に、『賢者ナータン』がある。この中に「三つの指輪」というメルヘンが含まれている。北尾次郎も、こうしたメルヘンを留学した当初、沢山読んだのではないか。彼ら第一回目のドイツへの政府留学生達が、メルヘンを使って、ドイツ語の勉強していたことが、長井長義の伝記に出てくる。

下宿先の夫人が、もう立派な大人になっている長井に童話を読み聞かせた、という話だ。同じような教育を、一四歳の北尾次郎がベルリン到着後、最初に受けたとすれば、メルヘンから受けた影響は大きいであろうし、自分でも創作をしてみようと思い立つのも自然な流れである。

北尾次郎邸の本質は「メルヘン建築」

さて、二〇一三年四月、江戸東京たてもの園に復元された一軒の異人館のような洋館建築がある。東信濃町二九にあった北尾次郎の自邸である。（いまはまだ「デ・ラランデ邸」の名称で、北尾次郎の没後、借家人としてこの家に住んだだけのドイツ人建築家による設計建て替え作品として解説されているものの、筆者の調査結果からは、明白なる史料がいくつも発見され、今後、北尾次郎本人設計の「旧北尾次郎邸」と訂正・改称されるべきと考える。）

この北尾次郎邸の食堂壁面は彼のレリーフ作品で飾られ、詳細は本科研費報告書中に別論文として設計者名に関する議論として紹介させていただいている。建築にも才能を見せていた北尾次郎が、自伝的メルヘンまでドイツ語で執筆していたとなれば、驚きであろう。

本職は東京大学教授であり、普段は数式を操り、台風がなぜ生まれるか、気象学上の、現代ならばノーベル賞も夢ではない、研究などに没頭する半面、頭脳が切り替わると、今度はメルヘン作家に早替わりしていたのだから。

だが、彼がこのメルヘンを残してくれていたおかげで、この家の設計思想が、おぼろげながらも、見えてくる。

というのも、今回の筆者の北尾次郎邸調査によって、北尾次郎は、自ら小説を書き、その小説の舞台を挿絵にし、最後はこれを自分の描いた絵のように、実際の建築にまでしていた痕を辿ることができるようになったからだ。

谷崎潤一郎は、北尾次郎とは逆に、小説を書くたびに家を越したといっても過言ではないほどの引っ越し魔だった。谷崎にとっては、借りる家の構造、間取りこそが小説の重大なアイデアであり、構成要素だったのだが、北尾次郎は、先に小説を書き、今度はそれを演じるための生活の舞台として、自邸を設計したことになる。そのどちらもが、建築家の発想ではない。

後の借家人、デラランデもレッツルも、商業的建築家だから、売れる建築を

するという点では、価値観の優先順位が、北尾次郎とは逆なのである。

その意味で、北尾次郎邸については、建築家一般の作品としてではなく、小説家の作品、いや小説家が建築も行う「小説建築」、ないしは、「メルヘン建築」と命名すべきであろう。

北尾次郎邸が、なんとも風変わりに見えるのも、建築史家・藤森照信が、「アクの強さに当てられて、言葉もなく沈んでいると」と著作『建築探偵の冒険東京編』（一九八六）で表現した理由も、もし空想上のメルヘンの主人公が住む家としての設計だったのならば、納得できるだろうし、北尾とドイツ人妻、一人息子の親子三人は、まるで小説中の登場人物であるかのように、この家の中で、小説の続きをそのまま生きた、いや長く生き繋いだことになる。

詳しくは紹介出来なかったが、作品では、人間の持つ欲望が、時として人を狂わせ、一方で、一見するとどこか発達障害のようにさえ見える主人公であっても、邪（よこしま）な気持ちが全くない人間であれば、最後は本当の心の幸せを掴む事ができる、という説話世界が、影の主題ともなっている。

足に障害を持つ北尾次郎の妻、ルイーゼの心理を想像してみると、二人の関係、親子三人の関係、レリーフに出てくる家族関係が、いずれも同じ主題でくくられ、空想力によって、身体的障害苦から解放され、更にこの過程を共有することで、お互いが固い絆で結ばれるように変化してゆく、建築と小説を通しての物語的解決法を与えられたことになる。

『舞姫』主人公「太田豊太郎」は北尾次郎がモデルか？

「新帰朝者」であり、同じ島根県出身でもある北尾次郎と森鷗外。

まず年齢から見ると、北尾は一八五六年生まれ（公称一八五三年）、鷗外は一八六二年（公称一八六〇年）で、北尾が三年、鷗外が二年、それぞれ年長に詐称していた。どちらも学校の入学に際し、規定年齢に達していなかったための公然の便法である。それほど二人は秀才であったわけだ。

家庭も、藩の御典医の子息で、北尾次郎の場合、当初は医者になることを求められたが、途中で物理学や数学に転じたことから、最後まで養父とは折り合いが悪かったといわれるほどだ。

ドイツ語を終生友とし、これを完璧にマスターしていた点も共通している。

留学した時期は、北尾次郎が、一八七〇年一二月から八四年一月頃にかけて（日本の出入国時点、帰国は八三年一二月ともされる）であるのに対し、鷗外は、まるで入れ替わるように、一八八四年から八八年までとなっている。

留学先は、北尾がベルリンであり、鷗外は、ライプチヒ、ミュンヘン、ベルリンであった。

北尾次郎は、日本で正式な中等教育は受けないままに、いきなりドイツの大学に入学し、日本の大学は経ないで（北尾の時代にはまだなかった）、そのままゲッチンゲン大学で博士号を取得している。

一方の鷗外は、現在の東大医学部の第一期生となる形で、まずは日本の大学教育を終了した後、陸軍軍医の身分でドイツへ官費留学させられている。

北尾次郎は、ドイツ到着三年目に、日本政府の急激な方針転換で、留学生全員に対し、日本に帰国するよう命令が下ったが、これに従わず、あとは自費でベルリンに留まる道を選んだが、鷗外は、北尾のような金銭面での苦労はなく、五年間の留学期間中、所定の留学費用は支給されていた。

女性の好みも、北尾はドイツ人妻と結婚し、鷗外もドイツ人女性を恋人としたことから、おそらく理想は日本人よりもドイツ人にあったのであろう。

にもかかわらず、これまで鷗外研究者から誰も北尾次郎との関係に言及した者はいなかった。その理由としては、おそらく鷗外全集等を読んでも北尾次郎について触れられているところがなく、日本語文献を読む限りは、北尾次郎は鷗外研究上は対象外であると見られたからであろう。

研究誌『鷗外』六一号に平賀英一郎「北尾次郎の伝記的諸事実について」があることだけが唯一の鷗外関係での北尾次郎参考文献となろう。だが、非常に緻密に書かれている平賀の労作を前にしても、鷗外研究者からは誰も反応した形跡はない。

どんなかすかな「ゆかり」程度の情報でも細大漏らさず取り上げてきた鷗外研究者が多いなかで、まさに『舞姫』執筆中である筈の時期に、ドイツ語で共同して雑誌を発行していた二人の関係について、関連性を研究をしようという鷗外研究者がなぜ出てこなかったのかは、少々理解に苦しむところでもあった。それが、本稿執筆の動機である。

高校教育現場での『舞姫』不人気の原因はどこにあるのか

さて、鷗外『舞姫』は、昭和三十年代から日本の高等学校の現代国語の教科書に採用され続け、定番作品となってきた。

ところが最近、この小説の理解を巡って、現代の高校生たちからは、主人公の太田豊太郎が、ベルリンで知り合ったドイツ人女性エリスを妊娠させたまま、最後は彼女と胎児を捨てる形で、日本での立身出世の道を選び、ひとり帰国するストーリーに対しての反発・反感が強く、国語教科書から除外すべきではないか、という意見までが出始めているという。

明治時代の男女の関係が、たとえ小説といえども、読者の高校生としては感情移入して読むことが出来ず、太田豊太郎を、ただ単にエリート主義的人物だと考えられてしまう時代になってきた。

例えば、伊藤誠子『舞姫』と教科書　~定番教材『舞姫』を学校現場で読み続けるために~」(山口大人文学部国語国文研究会紀要『山口国文』第三二巻、二〇〇九年、一九七頁以下）では、こう総括されている。

「近代的自我の目覚めと挫折」を中心に据えた定番的な読解は、生徒の生活実感から離れ、知識としての『舞姫』理解に止まるおそれがある。また一方で、「恋愛」や「友情」のあり方を問うことは、展開の仕方によっては「正しい恋愛」「正しい友情」という価値観の刷り込みにつながり、望ましい青年期の行き方を考えさせるためだけに『舞姫』を用いる授業となってしまいかねない。このような授業展開を避けるためにも、「定番教材」ではあっても、文学研究の進展の成果を生かした「定番」ではない授業のあり方を模索する必要があるといえよう。

『舞姫』は使い方によっては現代を生きる生徒に十分訴えかける内容を持ち、新たな授業展開の可能性を含んだ作品となるといえるだろう。」

はじめからこの作品を鷗外の自伝小説であり、私小説だと思い込む読者が実に多く、本来は虚構として読むべき小説の世界と歴史上の人物像が一体化し、ますます混迷の度を深めていく。前田愛、田中実らの読解論を援用してみても『舞姫』はますます世代を追うごとに理解され得なくなり、女性蔑視の時代の負の遺産として、ステレオタイプな評価をなされがちである。

主人公太田豊太郎のモデルは本当に武嶋務という軍医だったのか?

有名小説では必ずモデル探しが付きまとう。

『舞姫』もモデルがしつこく探し続けられている作品の一つであろう。

これまで話題となってきたのは、主人公の太田豊太郎ではなく、専らヒロインの「エリス」の方である。

鷗外の恋人女性であるとみられてきたことから、国文学者のみならず、様々な立場の人々の興味関心を呼んで、エリス探しを主題とする数多くの著作が公刊されてきた。

ところが筆者が取り上げたいのは、相手役の太田豊太郎の方なのだ。
教科書会社でもある、筑摩書房のホームページでは、高校で国語の指導にあたっていた、鈴原一生元愛知県立蒲郡東高等学校教諭による「舞姫先生は語る」中、「太田豊太郎は九〇パーセント森鷗外です。」と解説されていて、教育現場では、基本的に「太田＝鷗外」とされていることがわかる。

また、一九六七年に初版が出版された、旺文社文庫版でも、鷗外研究家の国文学者・長谷川泉が、森鷗外本人単独を太田のモデルとし解説していた。（一九八九年に映画化された郷ひろみ主演の映画版『舞姫』では、主人公は軍服を着た軍医の豊太郎であって、鷗外だと連想させるような形で、原作とはかなり改変されて映像化されており、小説に出てくる法学士の太田ではなくなってしまっている。）

一九七〇年代になってからは、長谷川泉からも新説が出されるようになる。長谷川は、「作中の主人公太田豊太郎が鷗外その人であるとともに、原田直次郎でもあり、また武島務でもあるという、作中に落とされている影からは、鷗外との関係においてそれらの人物を追及する意欲に駆られることになる」（『日本近代文学』、日本近代文学会、一九七〇年、二頁以下）とし、主人公については、長谷川自身も鷗外単独モデル説から複数モデル説に変わったのであるが、一般的な理解としてはそうではなく、たとえば、ミュンヘン時代に交流を深めた画家の原田直次郎は、現在ではモデルとは呼ばれていない。いつの間にか、武嶋務説だけが定説とされた感がある。

武嶋務は、鷗外の教え子でもあり、鷗外の留学中に私費留学生として軍医の身分でベルリンに同時に滞在していたが、国内の身内からドイツへ送金するべき留学資金を詐取され、ドイツでの生活費に事欠くありさまとなった。

結果、軍人の体面を穢したとされ、責任を取らされて、本人は陸軍を免官処分となり、直ちに帰国すれば旅費だけは公費で負担するが、滞在を続けるなら面倒は見ないと通告を受ける。それでも屈せず、茶を商う貿易商に勤めて医学の勉強を続けようとしたが、不幸にも結核に罹り、ドレスデンで一八九〇年に客死した。

これまで武嶋を太田のモデルだと考えられてきたのは、軍医を讒言により免官になった事実からだけであって、この点が『舞姫』主人公の太田豊太郎が、踊子エリスとの交際を留学生仲間から讒言され、ベルリン留学中に免官になる小説のストーリーと少し重なるためであった。

長谷川によれば、武嶋の出身地は、埼玉県秩父郡太田村で、現在の秩父市であり、主人公の太田姓は武嶋の出身地名からとられた、という。

実際に、この長谷川説に基づいて、秩父市では、ドレスデン市との国際交流を行ってきてもいる。

埼玉県のホームページには、武嶋は、「埼玉ゆかりの偉人」のひとりとして紹介され、次のように解説されている。

「近代文学史上不朽の名作といわれる森鷗外の処女作『舞姫』の主人公である太田豊太郎の設定には、秩父郡太田村（現秩父市）出身の軍医、武嶋務の生涯が色濃く投影されていた。太田豊太郎の名前も、務の出身地秩父郡太田村の太田と、鷗外の実名である林太郎とを合成して命名したものと考えられる。務は秩父市に生まれ、明治一九年私費留学生として、ドイツのベルリン大学へと遊学した。一方、鷗外も軍医留学生として二年前にドイツへ渡っており、ベルリンの地で二人は邂逅をし、親交を重ねている。その後、務の実家から送金を頼まれていた人物が学費を着服、仕送りが途絶えたことをめぐり、務は仲間から中傷を受け、帰国命令が下った。これを拒否して留学を続けるうち、明治二〇年、免官処分が下され、軍職を失うことになった。それから三年後、務が二七歳の

時、ドレスデンで結核のため、短い不遇の生涯を閉じた。帰国した鷗外が『舞姫』を発表した四ヶ月後のことだった。」

この武嶋の経済的苦境を救い、死後はドレスデンに立派な墓まで建て、遺族にも援助したとされるのが、亀井茲明で、旧津和野藩主亀井家の第一三代当主であった。もちろん鷗外も、ドイツ滞在中、両人と深く交流していた事実は、『独逸日記』にも出てくる。(尚、亀井は、北尾次郎が下絵を描いていたとみられる、オーナメント写真等が載っている建築写真集を含め、大量の美術関係の書籍をドイツで蒐集し、東大では現在、亀井文庫となっている。)

ただよく見ていくと、武嶋務が太田豊太郎であるという説ではあまりにもストーリーとの一致点に乏しい。讒言により不幸にも免官となった事実以外には、『舞姫』と重なる部分がほぼないのだ。

むしろ、『舞姫』公表当初の状況から見ると、武嶋は女性問題により非行を咎められたのではなく、単純に本人には責任のない、親族の一人の裏切り行為により、留学資金を詐取された犯罪被害者であり、身の潔白をより強調すべき立場の、当時は依然現在進行形の詐欺事件の被害者でもあった人物をわざわざ小説の主人公にするであろうか、という大きな疑問が残る。

仮にせよ、小説のような女性問題が武嶋の身にあったと世間が誤解すれば、かえって非難を受けやすくなる点でも、当時の鷗外としては、ドレスデンで死の床にあった武嶋を念頭において、彼を主人公として小説化しよう等とは思いもしなかったはずである。

鷗外が、留学中の日記を基に、後年自身の手で編纂した『独逸日記』でも、留学当時、鷗外は武嶋の身に起きたことに心から同情し、出来うる限りの弁護を上官に対しても行っていたが、免官処分は覆らず、効果がなかったことが読み取れる。

北尾次郎の場合、太田豊太郎のモデルとしてはどこまで一致するか

①『舞姫』では、太田豊太郎を、**大学卒業時点でトップクラスの成績を収めた大秀才**として描き、まずこの点では、北尾、鷗外ともに該当する。太田が「法学士」の設定で、法学部卒業であることに対しては、北尾、鷗外、武嶋のいずれも理系のため該当しない。そのなかでも、北尾次郎だけがプロイセン憲法に関する『普国憲法起源史』(一八八四年)を出版しており、三人中唯一人、法学の著作を著していた。

②**十九歳で、大学を卒業**したとされる主人公の設定は、鷗外に重なるが、最初のドイツ語版『舞姫』を読むと、「十九歳で博士号を取得した」とあり、この点では、二〇歳で博士論文審査に応募し、一度は不合格になるも、翌年に博士号を取得した北尾次郎が年齢的に近い。(なおドイツ語版『舞姫』については、東亜版以降も幾つもの翻訳がある)

③**官費留学を廃された**という点では、北尾次郎がまさに該当する。北尾本人には何ら責任はなかったのだが、同時期に海外留学した薩長の論功留学生らの風紀の乱れがひどく、そのあおりで官費留学生制度自体が一旦中止され、それ以降の学資を失ってしまった北尾次郎の舐めた経済的辛酸は、主人公・太田豊太郎と全く同じ状況である。

④**経済的苦境のなかで、現地の女性が援助の手をさしのべてくれ、恋愛感情が芽生える**ようになる点も、妻の子供時代から一緒に暮らした、北尾と妻ルイーゼの馴れ初めに酷似してくる。最初の出会いが、お互い大人となってからの恋愛感情からではなく、高校生と小学生くらいのまだ相手を意識しない年齢で、下宿人としての同居であり、まるで兄妹のように育ったことが、

北尾家では夫婦間の理解に繋がり、珍しいことではあるが、もし鷗外がこれを眺めていたならば、うらやましくもあったであろう。

男女の年齢が七歳離れ、相手の女性がまだ少女のうちに、知り合う点で、小説の設定と北尾次郎のなれそめとは実によく似てくるのだ。これはまさに、ドイツ版・筒井筒とでも呼ぶべき存在であったろう。（なお、鷗外自身は、留学資金を止められて、現地人の援助に頼るなどという経験はしていない。）

⑤**アルバイトについても、新聞雑誌への投稿活動**という点では、北尾次郎がまさにそれであったが、武嶋にはない。最近筆者はベルリンの図書館で、一八七七年に、北尾次郎が現地の月刊誌"Westermann's illustrierte deutsche Monatshefte"（日本でいうならば『文藝春秋』みたいな読み物中心のもの）の一八七七年版六月号以降に「日本の神々」と題して、日本の神話について投稿していたものを発見した。イラストも北尾次郎のものとみられるものが多数あり、日本語固有名詞や地名の誤植は目立つものの（多分、校正なしだったとみられる）伝承にあったドイツでの現地誌への投稿事実が判明した。

⑥**日本での出世を諦めていたところに、日本からの賓客が現れ（天方伯）、有能な仕事ぶりを認められて登用が決まり、日本へ帰国する展開**も、北尾次郎には類似の図式があったが、鷗外は、官費留学生なので、ベルリンに訪れた日本からの賓客により、スカウトされ、生活が変わったという体験まではしていない。北尾次郎は、留学の最後の時期に、北畠道龍なる当時は非常に有名だった本願寺派遣の仏僧を案内して、長期にわたり同行し、通訳を行い、ヨーロッパ各地を旅している。伊藤博文も師事した、有名な行政学者・憲法学者のローレンツ・フォン・シュタイン博士から約二ヶ月にわたり、北畠と共に個人教授を受けており、これなどはまさに外交官の仕事に匹敵し、太田の描写とも重なってゆく。この時期には既に妻となるルイーゼとの結婚を決めていた。

⑦**二人が長期間別れている間、女性の方が、北尾次郎がそのまま北畠道龍と共に日本に帰国してしまうのではないかという不安を強く持った**であろうことは想像に難くない。おそらくこの時期前後に、北尾の妻になる女性は、階段から落ちて、片足を切断しており、この身体的ハンデが、妻に将来についての激しい不安を覚えさせたことであろう。

平賀前掲論文では、「ルイーゼが凍りついた道で転倒し骨折したことが直接のきっかけだったと伝える。ルイーゼは左脚が付け根からなく、義足だった。このときに切断することになったのだろう。かねて親しくしていた娘がそんなことになり、一層愛情をかき立てられたのだろうと想像する。」とある。

今回筆者が発見した読売新聞記事（本稿最後に引用）が、梯子段から落ちたとするのに対しやや異なるが、平賀が参考文献としたものは北尾次郎の孫宅にあった「"Fujinkai",1913」なる（平賀にも）出自不明のもので、日本語記事の独訳書簡でオリジナルは確認されていない事情があるため、本稿では読売記事を優先した。いずれにせよ、突然の怪我が、二人の関係に危機的な状況をもたらし、『舞姫』ではエリスが発狂したように、ルイーゼも次郎を失うのではないか、と一大事になったであろうことは容易に想像がつき、これを後年、鷗外が聞いて小説の参考にしたのではなかろうか。その意味では、ルイーゼもモデルの一人であり、エリス像に明らかな影を落としている。

『舞姫』の終盤で、ロシアへの天方伯同行を果たした豊太郎に対し、エリスが不安を露にするところは、北尾夫妻の体験とも重なっている。明らかに異なる点は、結婚することで、ハッピーエンドに終わった北尾次郎夫婦に対し、小説では、エリスは豊太郎に棄てられたと知って発狂し、ベルリンの精

神病院に運び込まれる最後であるが、これは、三人の誰もが体験していない悲恋的結末となっている。

⑧北尾の妻の出身地は小説上の「エリスの母」出身地（「ステツチンあたりの農家」）とまさに同じエリアである。

北尾次郎の妻の故郷は、ベルリンから鉄道で北東方向、ベルリン＝シュテッチンを直結した幹線でエバースヴァルデまで行き、そこで支線に乗り換えて行くアルトランフト（Altlanft）周辺にあり、洗礼簿や日本の戸籍謄本にある出生地はオーデル河畔近くの純農村、ノイレーツ（Neureetz）である。オーデル河とは、第二次世界大戦後の、新しいドイツとポーランドの国境線、オーデルナイセ国境になっている川で、今では対岸はポーランドとなっているが、舟運の便が良く、鉄道ができる前からシュテッチンと直結した文化圏であることから、まさに小説舞姫に出てくる、エリスの語る母の故郷とされる場所に該当する。昭和に入ってから、北尾次郎の息子、富烈が、公用で長期のヨーロッパ出張をし、その際のアルバムにも「母の故郷、アルトランフトにて」と書き添えられた一枚の農家の裏庭で撮った写真が残っており、その時代になってもまだ係累などがいたことがわかる。（一八七頁写真）

この地域とシュテッチン（Stettin）との結びつきを今なお感じさせられることは、先祖調べで必要な教会簿（Kirchenbücher）並びに身分登記簿（Zivilstandsregister）で百年以上前のものは、ポーランド側にオリジナルがあることで、現在のシュチェチン（Szczecin）に出かける必要もある、と現地でアドバイスされたことであった。（ベルリンで見つからない場合）

歴史的史料が、ポーランド側にあるということは、第二次世界大戦の結果として、オーデル河で国境線が引かれるまでは、この地域は、ベルリンというよりも歴としたシュテッチンの経済文化圏であったことがわかる。

小説の中では、エリスが何とか太田豊太郎と一緒に自分も日本へ行こうと考え、母親とも話し合う。日本までの船賃が高いので、親子は別れ、母だけは「ステツチンあたりの農家に遠き縁者あるに」親戚がいるので、そこへ預けるとまで言い出す場面で、飛び出してくるのがこの地名なのだ。鷗外はシュテッチンにも出かけており、車窓風景などが念頭にあったといえよう。

⑨法制史や法哲学を学び法律家としての意識が変化してしまう太田豊太郎

そもそも『舞姫』では、法学士である太田が、ベルリンで大学の自由な風に触れるうちに、当初は東京からの指示に従って、プロイセンの法制度や法律だけを調査する任務に疑いを抱かず忠実に従っていたところ、心境に変化をきたし「法の精神」を説くようにまでなって、官長の不興を買うようになり、そこに折悪しくも留学生仲間から踊子との交際を讒言され、免官になる。

そこに至る法制度一般に対する意識変化が、小説のもう一つのベースになっているわけで、これを鷗外は誰をモデルに思いついたか、との疑問が出てくる。北尾次郎は、留学末期に、ローレンツ・フォン・シュタインからの個人教授をウィーン郊外のシュタインの別荘で北畠道龍と共に受け、その成果を帰国後、『普国憲法起源史』に著した。北尾次郎は序文で、

「彼の有名なる政治博士スタイン先生と鄰居し日夕に親炙して其高論卓説を聴くを得たり　而して先生特に予が為に政治憲法の事を説き毎に哲学上より見解を下し奥妙精確復た余蘊なし
予は物理学者なり然れども常に謂ぅ政治憲法のことは人間有すへき普通知識の一部分なりと故に先生の説を聞くに及んで又加々感する所あり」

とし、シュタイン教授から個人的に、特に哲学上から見た憲法論、憲法の起

源史を説く必要性を感じた事を書いている。シュタインは憲法制定を控えた、当時の日本ではシュタイン詣と揶揄されるまでに、ウィーンに行けばシュタインに会わずして帰る勿れ、とばかりに教えを請う者が門前市をなす有様で、鷗外の上官石黒も会うことを希望したが叶わなかったようである。この北尾の著作を読むと、太田の心境描写もまた北尾の実体験と重なるであろう。

以上概観していくと、これまで鷗外によるフィクションだと思われていた部分や、ドイツ以外の国々に日本からの有力者とともに旅行し、卓越した太田の語学力に相手が舌を巻き、日本への帰還、出世街道への引き戻しが起きる過程は、北尾次郎の体験とも多くの点で重なっていることが見えてきた。

何よりも、現地の女性と未婚のまま、相手の親とも一つ屋根の下に暮らし、やがて日本へ連れ帰るかどうかの決断を迫られる重大局面が訪れる点でも、北尾次郎のケースによく似ているわけである。

だが、武嶋の場合は、既婚者であって、現地女性との恋愛話などは全く残っていない。長谷川泉の説によると、鷗外の小説上の主人公の命名方法には、一定の法則があるとされ、何がしかモデルとした人物ゆかりの地名等を秘めているとされている。長谷川にとっては、武嶋の出身地が「太田村（オオタ）」であったことに、ピンとくるものがあったと考えるよりほかないが、北尾次郎についても、敢えて長谷川式に考えてみても、同様に「太田豊太郎」に行き着くことを添えておく。北尾次郎の出身地は松江であり、鷗外は津和野。両者の位置関係は、島根県の東端と西端になる。

その中間に、現在の大田市（オオダ）があり、もし鷗外に、北尾次郎の体験と、自分の思い出を重ねて描いた作品だと考えれば、両者の出身地の中間地点にある地名を選ぶこともあり得るだろう。(一八八九年当時の行政区画では「安濃郡大田村)「豊太郎」という名前についても、長谷川説では、「森林太郎」の林太郎から来ているということであるが、北尾次郎の幼名は（松村）「録次郎」であった。松村家に産まれた北尾次郎ではあるが、養子先の北尾家では長男となったことから、「太郎」と解されて不思議はなかった。「録」を、俸禄の「禄」と音で了解していたのなら、「俸給」の意から「豊」にも繋がろう。

長谷川泉との出会いと東ドイツ・マイセンでの事件

ベルリンの壁がまだ厳然としてあった頃、経団連などが出資していた、日本と東ドイツの交流を進める文化交流団体の事務所で長谷川に面会したことがある。

それはたまたま偶然であったのだが、その当時東ドイツに出かけようという物好きは、政治的団体を除けば、一、クラシック音楽ファン、特にバッハ、二、陶器マニア（マイセン陶器）、三、蒸気機関車マニア、四、森鷗外研究者、五、幼児教育のフレーベル研究者、の五種類であり、いずれも社会主義体制などお構いなしに、東ドイツにしかない物を探しに出かけた冒険者の一行であった。筆者のお目当てはこの二と三で、長谷川は東ドイツにも精通した鷗外研究者として、有名な存在であった。

お目にかかったときも、いろいろお話をするうち、秘密警察が付きまとう話やそれを振りきる時の話題で意気投合した。長谷川の方から「なんでもいいからお友達で、エリスの消息を知っている人がいれば教えてほしい」と依頼されたことを思い出す。

筆者は当時マイセンに個人的に滞在していたが、ある日のこと、知り合いの看護婦夫妻が「今日、日本人の旅行客が病院に運ばれてきて、そのまま死んで大騒ぎになっている。今秘密警察がウロウロしているので、病院には近づかないように」と知らせに来た。

というのも、警察当局にはホテルに泊まっていることにして、マイセンの

病院敷地内にある、古城のような古い建物を間借りしていたので、そこへは今夜だけは帰るな、という警告だった。翌日になって、マイセン駅のトイレで、日本人が倒れ、そのまま亡くなったことがわかり、現地の人々は、余りに汚いので驚いて心臓発作を起こしたのだろう、と噂していた。

ちょうど毎日正午頃に、ノーセン駅出発の蒸気機関車が牽引する貨物列車が駅のそばにかかるエルベ川鉄橋を渡ってくるので、これをいろいろな角度から古城を背景に撮影するため、筆者も駅近くの河原で粘っていたのだが、後から長谷川の著作を読んでみると、まさに筆者が蒸気機関車を撮影していた同じ時間帯に駅のトイレ個室内では、鷗外旧跡探訪ツアーで長谷川に同行していた、上野の水月ホテル鷗外荘（舞姫執筆の間などがある鷗外旧居跡のホテル）の役員が突然倒れ、出てこれなくなって大騒ぎだったらしいのだ。

その夜、秘密警察の動きが活発だったのも、日本側からトイレ環境の不備を問題にされることを恐れていたからだそうで、それまで何十年と放置されていたのに、翌日たった一日で、日本人遺族の訪問に備え、見違える様に綺麗に改装されたということだった。

それにしても、日本人の鷗外思慕の念たるや、まさに命がけである。

ドイツでは、鷗外を「日本のゲーテ」とか、「日本で最初に一人称小説、イッヒロマン（Ich-Roman）を書いた作家」として紹介され、もちろん『舞姫』も独訳、出版されている。

ベルリンには鷗外の下宿跡とされる場所に、フンボルト大学が記念館を開設しており、こうした動きは全て東ドイツ時代に始まったものであった。

当時は、日本からの投資を呼び込みたい東ドイツが、ある意味で政治的にもあたりさわりのない、鷗外やバッハ、蒸気機関車に、マイセン陶器を使って、交流を進めようとしていたものであり、それは概ねうまくいってもいた。

鷗外の足跡を辿ると、ミュンヘン時代を除き、ライプチヒもベルリンも彼の関係した場所は殆どが東ドイツ領であることがわかり、「鷗外のことを知っていますか？」と尋ねると、西ドイツ側出身の人は今でも殆ど知らないが、東ドイツ側の人々は昔いろいろと宣伝されたことから、比較的よく浸透しているのに驚かされる。秘密警察が素早く動員されたのも、日本からの投資に水をさされないよう、素早く事態を把握しようとしたからであろう。

長谷川はすでに鬼籍に入り、北尾次郎の話をしてみようにももはや不可能であるが、武嶋説を生前強く訴えられていた研究者だっただけに、新説としての北尾次郎モデル説を出すには、筆者としても正直ためらいはあった。

『舞姫』は「最も論議を呼ぶ、ミステリアスな作品」

『舞姫』に関しては、研究者の間でも、ミステリアスな部分が多く、虚実入り乱れて小説化されているため、本来は読解のプロといわれる国文学者であっても、虚構に引き込まれ、小説の世界を鷗外が体験したことであるかの如く記述してしまったり、またそれをもとに論争したり、研究活動そのものがひとつの探偵小説のような独特の展開を辿っていることが特徴的である。

特に昭和五〇年代には、『舞姫』を巡る論争が盛んであった。長谷川泉が、東ドイツに何度も行き、東側に残された鷗外旧跡を辿っていたのも、鷗外ブームの流れによるものであったろう。

しかし現在は、近代文学への人気自体が低調であり、文学部の学生も先行研究の多い、大家、大御所とされる作家の研究は嫌がるようになり、既に述べたように、特に『舞姫』については高校生たちからの評判が良くない。

ただ昭和五〇年代に議論された、問題点や不明点は、その後三〇年経っても殆ど解決していないことがわかる。本稿でも、いくつかのキーワードを当時の文献からピックアップしてみよう。

『森鷗外の断層撮影像』（至文堂、一九八四）は、長谷川泉が中心となって

論文をまとめ、座談会も行った本である。その中の座談会で語られていた研究者達の指摘を引用してみたい。（二六八頁以下）

「この『舞姫』という作品は、これは日本近代文学の名作史上、最も論議を呼ぶ、或いは、ミステリアスな作品と申していいかと思います」「実に沢山な探求すべき問題の宝庫」「『舞姫』の謎というものは、そう簡単に一朝一夕で近い将来に完全な解決に達することの出来ないほど入り組んだ複雑な要素を持っている、そういう作品であると思います」「今までの鷗外研究というのは、極端なことをいうと、あの明敏な鷗外だから云々という、そういうようなひとつの上げ底的な論理が多かった」（萬田務）

「いわゆる舞姫論争を舞姫論に持ち込む場合、当然のことですけれども、『舞姫』も初出本文を使用しなければ意味がない」「『舞姫』という作品は、要約に過ぎて筋書き的であり十分に書き込んでいないというようなところがありまして、様々な矛盾が生じいろいろな読み取り方が生じるという二つの面が出てきます」（嘉部嘉隆）

「あの冒頭における痛烈なまでの豊太郎の内面的自虐を支えていたのが、真に愛しえず、結果的にはエリスの純愛を利用して棄て、発狂しめたという、この罪人の意識であったとみなければならないほど、鷗外はそのように形象化している」（山崎國紀）

「そういう（自分の生活の実存の反映）破片と自分はおもにドイツ語で読んだ作品を上手に換骨奪胎作品として作り上げている、そういう性癖がある」（長谷川泉）

「鷗外の性癖としての、実生活のフラグメントをそのまま、或いはいろいろと分けて作品の中に盛り込む点、あるいは非常に消えがたい印象を持っている人物、あるいは事件というものを、それを作品の中にはめ込むという性癖」（長谷川の発表を受けての、司会者・谷沢永一の感想）

長谷川はまた、「『舞姫』のはらむ問題性」として四点をあげているが、最初の二つに注目する。（「森鷗外の『舞姫』材源」『比較文学研究・森鷗外』吉田精一編、朝日出版、一九七八）

①原稿から定本までの過程に、鷗外自身による文章の改変が他のどの作品よりも多く、そのような改変を敢えてした理由の究明も問題となる。

②「原材料としての鷗外その人と、その周辺の人物のモデル性が認められ、従って『舞姫』理解と享受のためには、その背景の事実の検索についての関心をそそることになる。」

この長谷川の指摘を本稿に当てはめてみるならば、一つ目の、異常に多い本文改変理由としては、もし最初から日本語で書いたものであれば、それほど表現にこだわること自体、不自然である。明白な誤植はさておき、何故そこまで日本語の表現として、鷗外は改変にこだわり続けねばならなかったのか。この問いに対する、ひとつの答えが、ドイツ語でいきなり書いた可能性であり、それが長谷川のいうところの「亜瓦船中稿」に相当するものなのではないのか。

二つ目は、『独逸日記』には掲載されなかった、当時の鷗外周辺人物の「検索」必要性である。『独逸日記』は後年、鷗外自身によって編集されたものであり、不都合な部分は削除、改変された可能性は否定出来ないからだ。

鷗外自身は「自作小説の材料」で『舞姫』は事実に拠って書いたものでは

ありません。能くああ言ふ話はあるものです。ポオデン、ステツドといふ人の書いた小説に・・・」と弁解している。確かに「事実」に拠って書いたものとは言いがたいが、モデルがいないとまでは言い切っていない。

知られざるもう一つの『舞姫』（一九〇八年『東亜』誌連載・ドイツ語版）

小説のモデルとは、一般的に複数の人物を合成して作られることが多く、北尾一人でもなく、鷗外単独でもないだろう、と筆者は考える。さらに小説では虚構が加えられ、誰とも特定され得ないように仕上げられる。

ただし、北尾の存在を知ってみると、『舞姫』の読み方自体に広がりが生まれ、高校生の理解も深まるのではないか？

特に、北尾次郎が最後は片足のなくなった、ルイーゼと添い遂げる実話は、小説の『舞姫』とは真逆の展開であり、ドイツ語文藝雑誌編集を通じ、鷗外からいろいろ取材されうる立場にいた北尾次郎が、主人公太田とは似ているようで、実は全く違う人生を生きていたということになると、この小説はやはり結末部分は完全な虚構であり、スリリングに、ドラマチックにするために、敢えてああした最後を用意したものだと、高校生の読者たちも知った上でこれを読めば、少なくとも鷗外に対する反感は消え失せるであろうからだ。

鷗外自身も生前、この作品を実話ではないと否定はしていたものの、余りに有名になったことと、恋人らしき女性がベルリンから日本にやってきていたことは鷗外存命中は知られていなかったが、戦後公表されたことから、どうしても周囲が放ってはおいてくれず、いつのまにか、若い読者層からは反感や憎しみまで買う事態になっているとしたら、これは非常に不幸なことであろう。この誤解を解きたい思いもあり、以下の仮説を検証してみたい。

「実は、初版とされる国民之友版より先に書かれた、『舞姫』の素案、或いは、私家版のようなものが既に存在したのではないか？」

この仮説について、長谷川の著作を丹念に探していくと、やはり筆者と同じような疑問を持っていたことがわかった。（アンダーライン部分）

「鷗外自筆の舞姫原稿は、朝日新聞社社主上野精一の愛蔵するところである。毛筆で和紙二八枚にしたためられたものである。鷗外独特の細字体の筆触は美しく、鷗外の性格がうかがわれる。この原稿が、小金井喜美子（註：鷗外の妹）の言う、明治二二年の暮れ近く執筆されたものである。この肉筆原稿の筆触を見ると、書き下ろしのように思える。だがそれについて異考は成立しえないのだろうか。私は、コロタイプ版で複製された『舞姫』肉筆原稿に付した解説「『舞姫』草稿について」の中で、亜瓦船中稿の存在を仮説し、そのことが全く妄誕とは言えぬのではないか、という問題提起をしてみた。その根拠は『舞姫』の冒頭文に、太田豊太郎の帰東の船中の回想として『舞姫』の一文が成ったことが記され、また鷗外が相沢謙吉の名前で「しがらみ草紙」（明治二三年四月）に発表した「気取半之丞に与ふる書」において「嘗て一たび氏吾友太田豊太郎が舟中にて作りし記を読みたれど、徒に其事に動されしのみにて・・（中略）近頃聞けば、鷗外漁史といふものありて、此記に題するに舞姫の二字を以てし、これを国民之友の紙上に公にしたりといふ。」という文を重要視するからである。このことを鷗外自身に即して考える限り、『舞姫』の原形、しかも、殆ど定稿で、『舞姫』の題をつければ、今日の『舞姫』となるような作品は、既に作られていたことになる。」（「舞姫の顕匿」、『続森鷗外論考』、一九六七年一二月）

さて、『舞姫』の初版は、一八九〇年一月に出版された『国民之友』新年号附録誌上だった。

そしてこの自筆原稿が、現在まで伝わっている。

朝日新聞の社主である、上野家が長年伝えてきたもので、筆者も以前、作家陳舜臣と上野社主のお二人とご一緒させて頂く機会があり、京都にある、お互いが檀家でもある菩提寺の彼岸法要で、昼食の際に、直接この原稿についてのお話を聞いたことがある。

陳舜臣が「上野さん、確か舞姫の原稿をお持ちでしたね」と問いかける場面に思わず筆者も聞き耳を立てたことを鮮明に記憶している。この自筆原稿は、一九六〇年に非売品の写真版として、長谷川の解説付きで出版された。(二〇一五年、跡見学園女子大が上野家より舞姫原稿を購入したと報道された)

鷗外研究者の人々は、『国民之友』を初版とみなし、これをもとに、鷗外がどのように加筆修正していったかを論じるのが一般的である。

『舞姫』は、鷗外作品の中でも、異常なまでに多くの加筆修正が加えられた作品であり、鷗外は終生、筆を入れ続けていた。(嘉部嘉隆編『森鷗外「舞姫」諸本研究と校本』(桜楓社、一九八八年)に詳しい。)

長谷川の仮説によれば、鷗外は留学の帰りに乗船した、フランス船Ava号の中ですでに舞姫の原形を書き上げており、そのことは、鷗外自身も既に語っているところではないのか、という疑問であった。もし、これが事実ならば、現在自筆原稿で伝わっている『国民之友』初版用自筆原稿の前に、更に古い『舞姫』が存在したことになる。

舞台はがらりと変わるが、一九世紀の終りから二〇世紀の初頭にかけて、ベルリンの日本人社会からドイツ語による月刊誌が刊行されていた。

『東亜　Ost-Asien』(一八九八～一九一〇)誌である。初代主筆となった、玉井喜作(一八六六～一九〇六)は、これまた非常に変った冒険者であり、札幌農学校でドイツ語教授を務めた後、シベリアを徒歩で横断してベルリンまで行った立志伝中の人物でもあった。

東亜主筆・玉井喜作から北尾次郎宛葉書

この雑誌は、北尾次郎研究においても重要な情報源であり、当時の日本人社会や在留邦人、独系貿易商社などの住所が定期的に掲載され、筆者の親族にも戦前ベルリンに住んでいたとされる者がいたため、その旧居探しや、神戸の風見鶏の館に最初に住んだトーマス家の日本での会社住所などが出ており、以前からよく手にとっていた。

この中に『舞姫』のドイツ語訳が連載されていたことに気づき、思わずコピーをとったことがそもそもの関心、きっかけであった。二〇〇六年のことである。その当時は、トーマス家の子孫の方に差し上げる必要性からコピーしたのであるが、読んでいくうちに、ドイツ語で読む舞姫もまたおつなものだな、と気付かされた。(なお、玉井喜作からは北尾次郎に宛てた葉書も残されており、両者はベルリンで面識があった。)

時代的には、『舞姫』の初版が一八九〇年だから、それから約一八年後のことになる。残念乍ら、国文学の立場からは非公式な版とされているとみられ、東亜版を諸本として取り上げたものは見当たらなかった。ドイツ文学の方からは、『東亜』誌研究者の泉健が、詳しい研究論文を公表しておられる。ただし泉は、国文学者ではないので、『舞姫』についての論考ではない。日本語版との比較でも、底本に戦後出版された岩波全集版を使っておられ

同誌掲載写真：左後方北尾、右下玉井

るため、この点ではあくまで参考程度ということになる。

更に、日本人登場人物の名前の表記について、国文学者の間では、『舞姫』の登場人物名を仮名にするならばどう読むべきかについて、これまた疑問とされているが、泉論文では、ドイツ語に表記された登場人物の名前が、全員不統一な点を誤植と考えられ、ドイツ語本文を全文引用される際に全て訂正、統一されていた。（泉健「“Ost-Asien”における森鷗外『舞姫』」、『和歌山大学教育学部紀要・人文科学』、第五八集二七頁以下）

例えば、主人公太田には Ota と Oda の二通り、相沢も Aizawa と Aisawa の両方、天方伯も Amekata と Amakata と、すべて二種類あることが泉論文で指摘されている。この指摘は、実は非常に重要で、舞姫成立に関わる事情を考慮すると、この不統一性こそが研究対象であり、まるで読者を煙に巻くためのカモフラージュではないか、とも見られうるからだ。

通常、翻訳者としては、登場人物の名前の読み方については、作者に確認するか、確認出来ない場合でも、統一を図っておくことが常識である。

もし一人分だけが不統一なのであれば、誤植だとも考えられ得るが、日本人名全員が不統一となれば、まずあり得ない話であり、逆に、読みからモデルを誰とは特定されたくない作者（鷗外）の隠された思惑が、私家版には巧みに反映されていたともみられ得る。

『舞姫』の登場人物中で、もし鷗外自身が振りかなを付けさせられたならば（実際はないが）真っ先に迷ったであろう点、それは「天方伯」であろう。通常、舞姫解題では、天方伯とは、山縣有朋を想定しているとされている。鷗外自身の政治家転身への希望や、これを受け入れなかった山縣への思い、また後年の親交など、二人の間には今なお解明出来ていない謎がある。

それだけに、もし最初に私家版のような形でこれをドイツ語で書いていたとして、山縣有朋の実力者ぶりからも、小説が公表される前に流出した時の危険性をも考慮し、敢えて登場人物の特定をされにくいように、尻尾を掴まれないよう、わざと誤植を装った印刷をさせたのではないか、とまで推理せざるをえない、当時の鷗外ならではの特殊事情も十分考慮されうるのだ。

それでいて、日本では長年、やはり謎とされてきていた、ヒロイン「エリス」の独語表示を、来日したドイツ人女性名（後年、英字新聞の乗船名簿からエリスではなく、エリーゼ Elise Wiegert と特定されるようになって初めてわかった実名の綴り）通りに、東亜版では正確に Elise と表記されてもいる。

肩書表記の謎　鷗外は一九〇八年当時「教授」だったのか？

東亜版では作者名が、Japanischer Roman von Professor Mori（原作森教授の日本語小説）とあるだけで、「鷗外漁史」や「森林太郎」でもなく、名前はなしで姓だけの「森教授」だった。森鷗外は陸軍軍医学校の教官に帰国直後に任命されているものの、教授ではなかったはずだ。東京の鷗外記念館に尋ねても、教授になった記録は聞いたことがない、とのことであった。

となると、はじめから「森教授」は実名ではない、ペンネームの一種だったとも取られうるし、まだ文壇デビュー前の話になるから、そもそもどう表記しようが自由でもあった。自身に迷いがあり、舞姫原稿上でも著者名部分に

紙を貼り「鷗外森林太郎著」に訂正してもいたほどだった。

尚、東亜版『舞姫』は、訳者が宇佐美濃守（うさみのうもり）という人物で、泉論文では、この人物の探求に詳しいが、鷗外との接点は触れられていない。この東亜版舞姫が、翻訳作品ではありえないと筆者が疑うのは、作者名表記からして、通常では考えられない不自然さに包まれているためでもある。

翻訳する前には必ず底本があり、それを前に宇佐美が一から翻訳作業をしたのであれば、著者名は、底本に表示されている以上、『舞姫』の場合、版によって著者名表記が違ってくるとはいえ、「鷗外森林太郎」（国民之友）、「鷗外」（国民小説）、「鷗外漁史」（美奈和集）のどれかを使ったであろうからだ。それが、本来全くありえない「森教授」作だったとなると、宇佐美が、自ら翻訳に当たった作品ではなかった、と考えざるをえなくなってしまう。

No. 115. Die Tänzerin. 305

Die Tänzerin. Nachdruck verboten.

Japanischer Roman von **Professor Mori.** Ins Deutsche übersetzt von **Nomori Usami.**

Schon sind die Steinkohlen zu Haufen geschichtet, die elektrischen Glühkörper der Beleuchtung sind noch nicht eingeschaltet. An dem Tisch in der II. Kajüte ist es sehr still. Die Gesellschaft der Kartenspieler, welche sich sonst jeden Abend hier versammelt, fehlt. Alle andern übernachten im Hotel am Lande, nur ich allein bin an Bord zurückgeblieben.

welcher ich nach Osten zurückkehre, ist wirklich nicht mein früheres Ich, wie es nach Westen kam.

In der Welt gibt es sehr vieles, doch nur noch von der Wissenschaft bin ich ungesättigt geblieben. Die ganze Jämmerlichkeit der irdischen Welt habe ich kennen gelernt. Ich verstehe jetzt das Misstrauen der Menschenseele. Wie leicht kann ich selbst mich und meine Seele verändern. Mein

右：東亜版『舞姫』第一回連載

翻訳者の存在を考えられないドイツ語で書かれた小説となれば、これ即ち、本当は何者かが、いきなりドイツ語で執筆していた作品だったということになる。

そこで、長谷川説に従って、もし一八九〇年の国民之友発表以前に、船中稿のようなものが先に存在したと仮定するならば、それはドイツ語で書かれていた『東亜』採録の内容であり、これこそが、『舞姫』の原形であって、鷗外は当初、『国民之友』発表に先立ち、ドイツ語として発表するか、日本語にするかを悩んだ挙句、最後に日本語で発表する道を選んだ、そのため、自作のドイツ語小説を、より滑らかな日本語としたい翻訳者的欲求と、もろもろの後発的諸事情が、鷗外に終生、絶えず筆を入れさせしめたのではなかろうか。

そして、最初からドイツ語で書かれていた"Die Tänzerin"は、私家版のような形で、ごく少部数だけが印刷され、鷗外を追って日本までやってきたエリーゼや、盟友賀古鶴所、北尾次郎や妻のベルリンの親族などに密かに配布、そのうちの一冊が、北尾次郎が一九〇七年九月に死亡した直後に何らかの形で、誰かの手から流出、特ダネ的に東亜編集部の手に渡ったのではないだろうか、と筆者は考えるのである。

もっと限定して、エリーゼだけに贈られた一冊だったのかも知れない。ただし、流出の経緯上、誌上では翻訳とせざるを得ず、宇佐美訳の形にしたのであろう。それでも、本当は翻訳などではない証拠をどこかに残そうとして、鷗外にだけはわかるように、私家版表記通りの、Professor Mori 作にされた・・・これが、筆者の「亜瓦船中稿」に関する推理である。

なお、一九〇八年一月号から〇九年四月号にかけて、全一二回連載・東亜版の出たあとになって、一九一七年に小池堅治が独訳した『舞姫』が日本で出版されている。

こちらは学生向けに、漱石の『倫敦塔』と並んで、和独対照、かつ鷗外から直々の謝辞があり、増刷版では、鷗外から贈られた漢詩色紙が口絵写真になっている。小池は塵泥版を底本にしていた。鷗外にとっての東亜版舞姫とは、黙認はすれども、公認ではなかったのではなかろうか。

東亜版『舞姫』の疑問点

以下の八箇所は、いずれも宇佐美による意訳乃至は誤訳の結果とみることも可能ではあろうが、登場人物名表記のみごとなまでの不統一と著者名表記問題を考えると、東亜版こそが草稿により近いものと考える根拠にもなる。

①「石炭をば早や積み果てつ中等室の卓のほとりはいと閑かにて熾熱燈の光の晴れがましきもやくなし、」で書き出される初版用の鷗外自筆原稿。だが既にこの部分からして、東亜版とは違っていた。ドイツ語版では、

・・・die elektrischen Glühkörper der Beleuchtung sind noch nicht eingeschaltet.

「白熱電球の明かりはまだ点灯されてはいなかった」とあり、舞姫原稿では、光が眩しいことを強調しているのに対し、東亜版では全く逆の表現になっている。(井上靖の学研版『舞姫』現代語版から引用するならば、「白熱電灯の光の晴れがましいことも無駄なことに思われる」)

場所はサイゴンの港。明朝の出港に備えて、石炭を積み込む作業が思いのほか早く終わって、まだ陽の高いうちから静けさが戻っていることを表現しており、もし鷗外がドイツ語で素直に書き出していたとすれば、まだ照明が必要な時間でもないはずなので、東亜版のほうが理に適っている。更に少し後で「今宵はあたりに人もなし、房奴の来て電気線の鍵を捩るには猶程もあるべければ」(井上訳：今宵は幸い周囲に人も居らず、室付きボーイがスウィッチをひねって電燈を消すのにも、まだ間があると思われるので)と、井上訳では、「電気線の鍵を捩る」を消灯のため、即ち就寝前の深夜のこととしているが、ボーイが来てスイッチを入れるのか、切るのかは、この書き出し部分の表現（未点灯だったのか、否か）にも連動するであろう。

ただ、当時の船舶の場合は、発電機の関係からも、常時照明があったわけではなく、発電し出してからスイッチが入れられたはずであり、夜間にボーイが各部屋を消灯して廻ったのでは不便であり、足元も危険なので、夕方、どの時間から照明が点灯するかだけが、船舶側の判断であったと考えられる。日本語版舞姫ではやや論理矛盾が見られるものの、その矛盾を飲み込んだとしても、敢えて傷心の太田豊太郎の気分を象徴するためには、今の太田には、白熱灯の眩しささえ辛く、黄昏時の薄暗くやわらかい自然光のなかで、回想シーンに入っていく方が相応しく、より劇的になる、と鷗外は考えたのではなかろうか。石炭の積み込みというのは、意外と大きな音がするもので、ポーランドで蒸気機関車のいる機関区に泊まったことがあるが、早朝からガラガラとクレーンから石炭が落とされる音で目が覚めるほどだ。同じく、人夫のスコップが擦れる音も喧しいものだ。石炭積載作業が終わった直後の静けさを鷗外は物語の最初に用い、ベルリンで起きたエリスとの驚くべき体験を語る導入部に活かしていた。

②太田豊太郎の神童ぶりを描写する部分で、原稿では「十九の歳に学士の称を受けて大学の建ちてよりその頃までにまたなき名誉なりと人にもいはれ」と、「学士号」を一九歳で得たことになっているが、東亜版では、何と「博士号」を一九歳で取得したとなっている。

Im 19.Jahre erhielt ich den Doktortitel. Es wurde öffentlich bekannt gegeben und ich den Leuten als einzigartig hingestellt. (「自分は一九歳で博士号を取得した。このことは公表され、人々からも比類なきと称された。」)

学制の整備された今では考えられないことだが、北尾次郎の二一歳での博士号取得の事例を知る在ベルリンのドイツ人ならば、もしこれを読んでも別段驚かなかったのであろう。

③主人公エリスの瞳について、原稿では「この青く大いなる物問ひたげな愁を含める目」とあるものが、東亜版では

Die grauen,reinen Augen! Fragend!

と、「青」ではなく、grau(灰色）で、rein(澄み切った）とされている。

ここもまた、特定の人物にだけは誰の描写かわかるような、識別のサインではなかろうか。ドイツのパスポートには目の色が書かれている。ただし、日本語では、灰色で澄み切った目、といわれてもピンとは来ない。動物の目になってしまうであろう。

④エリスとの初めての出会いの後、彼女の住む家を訪問、玄関扉前のシーンで、原稿では「少女は錆びたる針金の先きを捩ぢ曲げたるに手を掛けて強く引きしに」(井上訳：少女はさびた針金の先きを捻じ曲げてあるのに手をかけて強くひいた）とあるものの、具体的に針金とドアの開閉がどうなっていたのか、さっぱりわからない描写になっているところを、東亜版では、

Des Mädchens Hand zieht stark an einer Klingel,die von einem gebogenen rostigen Metallstück vorgestellt wird.

「少女の手は、呼鈴に付けられた錆だらけの曲がった針金を強く引いた」と、針金が玄関の呼鈴に繋がっているように表現している。ここも、鷗外とは気心のよく知れた、誰かの家をドイツ語版では正確に描き、日本での出版用からは、モデル探しに備え曖昧にした、とも見られうる箇所である。呼鈴(Klingel)の存在が、日本語版では書かれていないからだ。

⑤太田が留学中に理想としたとする、有名な「ニル　アドミラリー」(nil admirari 何事にも動ぜず、無感動な、外界に左右されない冷淡な態度）を東亜版では、vir admirable とされていた。admirable は「驚嘆、賞賛すべきこと」で、意味が違ってくるが、ラテン語に詳しくない読者相手ならば、この方が気に入ったであろう。そして、最後の結末部分はかなり違ってくる。

小説のあらすじ上の流れとしては、太田豊太郎がベルリンの貧民窟で知り合った美少女、エリスとの間にはだんだんと愛が芽生えてゆく。エリスはヴィクトリア座の踊子であり、つき合っているところを日本人留学生に見つけられ、東京の官長に讒言されて、突然、免官となってしまった。

このまま日本に帰っても汚名を雪ぐことは出来ないため、太田はベルリンにとどまる道を選択するが、もはや帰国旅費も支給されないことになり、欧州の大都会で野垂れ死にするも覚悟の、まさに背水の陣となった。

最初は太田がエリスの窮状を救う立場だったが、学資を失った太田にとって、下宿代にも窮するようになり、今度はエリスの家に転がり込み、同棲を開始、エリスが太田を救う番となる。追って故郷からは、免官の知らせを聞いて母が自殺(諫死）したと見られる遺書めいた手紙も届き、人生最大の危機を迎えたとき、ついにエリスとの最後の一線を越えてしまう。

学生時代からの親友、相澤が新聞社の現地通信員にと仕事を紹介してくれ、通信員として、ベルリン発の記事を送ることで、辛うじてエリスとの生計を維持していた。

そんなある日、今ベルリンに来ている、という相澤からの手紙を貰い、天方伯の秘書官として、超一流のカイゼルホーフホテルに滞在しているところに招待される。程なく太田の語学力が認められ、ロシアにも同行したところ、日本へ一緒に帰って、自分の下で働かないかと、天方伯から直々に誘われ、エリスが妊娠していることを知りつつも、とっさに応諾してしまった。

しかし、エリスと胎児を思うと、太田は残留か帰国か迷い続け、帰国を承諾した自分を後悔し、罪の意識に苛まされ続ける。

その夜、厳寒のベルリンの街を彷徨い歩き、高熱を発し、人事不省に陥る。相澤は、まさか太田が、エリスとのあいだに子供まで作っていたとは知らず、それでも太田が病床に伏せて意識のない状況下、太田の知らぬ間に、全てを

金で解決してしまっていた。エリスは太田に捨てられた衝撃から発狂し、ベルリン郊外の精神病院へと送られるが、その最後のやりとりで、東亜版では、明らかにドイツ語で読む相手に配慮してか、日本語で発表された小説とはやや異なる内容、結末になっていた。

⑥エリスの病名の変遷

「ブリヨートジン」（鷗外直筆原稿、国民之友版など）、「ブリヨオトジン」、「パラノイア」と版を重ねるごとに変化していく。スラングにある、Blödsinn「ブロートジン」に近い発音で、「馬鹿げた」「白痴、精神薄弱」（小学館『独和大辞典』）などの訳のある言葉を使ったものだと思われるが、いまも日常会話の中で、ベルリンでは、スラング的に頻繁に使用されている言葉で、馬鹿馬鹿しいとか、ヘマをやった、ドジった、といった意味もある。ところが、東亜版では、BではなくPから始まる綴りで、Plijossium-Wahnsinn と表記されていた。Plijossium だと辞書には全く見つからなくなる。Wahnsinn「精神障害、精神錯乱」がつくので、「プリョーシウム錯乱症」とでも訳すしかない、ラテン語風に仕立て上げた、架空の病名かとさえ思われる。

なお、Wahnsinn は普通「狂気の沙汰」という意味だが、単なる相槌で、びっくりだ、すげえぜ、などという軽い日常会話でのスラング的な驚き表現にもよく使われる。

男女の間や顔見知りの間ならば、気安く使っても構わない表現であり、おもしろおかしく、精神病の病名のように表記しても、相手が承知していたならば、構わないレベルの言葉だろう。

「パラノイア」に改められたのは、塵泥版以降（一九一五年一二月刊）以降で、さすがに病名であって深刻でもある。

またこの病気に関し、医師は「治癒の見込みなしといふ」というのが、日本語版の表現であるが、ドイツ語版では「殆ど治癒の見込みはない」と fast（殆ど）が入っており、これもモデルや当事者にしてみると、配慮のなされていることが伝わる表現であろう。

また、エリスの病名を順に並べてみると、時間を経るにつれ、より重い、或いは冷たい表現に変化していったことにも気づく。

特に一九一五年一二月の塵泥版からは、正式な病名「パラノイア」になってしまっており、これは鷗外の心境の変化、当事者たちの年齢・歳月による客観化、風化だけではない、世相の変化をも感じさせられる。

何故ならば、日独戦争（第一次世界大戦）が一九一四年に勃発しているからである。その当時の読者にとっては、もはや敵国民としてのエリスであり、国民之友の時代とは明らかに対独感情が大きく変ってしまっていた。

当時の新聞記事を眺めてみても、急にドイツ人に対して傲慢かつ小馬鹿にするような記事が目に付く。例えば、「獨逸の落人来る」（『神戸又新日報』一九一五年二月二五日）では「憫れむべき連中なるが日陰の身とて」、「在留獨人集会厳禁」（同二月二七日）では「在留獨人らは大打撃を被り何れも戦々恐々として大いに謹慎の意を表し居れりと」と日本人の意識変化が見て取れる。

⑦当時、日本人男性が、現地の女性との間に私生児を作ってしまった場合、一時金で養育費を渡すことがよくなされており、いよいよドイツを去る直前に、主人公太田は相澤と相談し、おそらく慣習にしたがった形で、金利だけでも生活できる程度の金銭を残すくだりがある。

自筆原稿や国民之友版（一八九〇）では、「相澤と議りてエリスが母に幽かなる生計を営むほどの金をば残し置きぬ」とある。これが、美奈和集版（一八九二）では「相澤と議りてエリスが母に微なる生計を営むに足るほどの資本を與へ、あはれなる狂女の胎内に遺しゝ子の生れむをりの事をも頼みおき

ぬ。」と、後半部分が付加される。ところが、東亜版では、さらに

Ich bat diese,sofort an mich zu schreiben, wenn das Kind geboren wird, das unter dem Herzen des armen irren Mädchens atmet.

「子供が産まれたら、ただちに自分に手紙を書くように」とエリスの母親に頼むくだりが出る。

女の母親に手切れ金を渡したはずが、子供が出来たら、その時はどうか直ちに手紙が欲しいとエリスの母に具体的に頼む表現を、ドイツ語版だけには書き足されているわけである。

日本で公表した『舞姫』とは明らかに結末の質が違っていたのだ。

⑧有名な最後の一文である。原稿では「嗚呼、相澤謙吉が如き良友は世にまた得がたかるべし、されど余が脳裡には一点の彼を憎む心は今日までも残れりけり」と、非常に世話になった友人の果敢な決断と親身な忠告に感謝しつつも、一方でまだエリスとの別離を受け入れることができない太田の偽らざる心境を吐露する場面だが、やはりドイツ語版では異なっていた。

Ach,es ist gewiss in der Welt kein besserer Freund als Aisawa zu finden, und doch ist er derselbe Mensche, für den bis jetzt nur Gedanken des Hasses mein Kopf erfüllen.

日本語版では相澤を憎む気持が「一点」だけなのに対し、東亜版では、「憎悪の念で私の頭は一杯である」となっている。

どんなに親友でも、恋人を巡る愛憎感情だけは共有出来ないことがある。そんなシーンでドイツ語版での相澤は、より悪役にされているのだった。

微妙な違いではあるが、全体を通して見て、東亜版では、明らかに読み手を意識し、それも限られた読者層・範囲を想定していることが言葉の節々から読み取ることができよう。

この救いようがないともいえる悲恋劇ではあるが、鷗外にとっては、続編をもドイツ語版上では想定していたのではないか、とさえ思える、一筋の光明がそこにはある。

というのも、ドイツ語版の結末では、子供が出来た時、その時点で、親子を呼び寄せることを再考する可能性が行間にちらりと見え隠れしているからである。

とりあえず太田は単身日本に帰るが、その後の展開次第では、エリスとの正式な結婚を考えなくもない、そんな余韻が東亜版には見られるのだ。

エリスの母親に、もし無事に子供が誕生したならば、とにかくは手紙をくれ、と頼むことは、認知問題含め、太田の実子として将来も面倒をみる意思表明でもあって、この小説が、すでに永遠の別離として終わった性格のものではもはやなくなるからである。

一方、相澤に対する憎しみを、日本語版よりも強調して書かれていたのは、やはり相手の読者たる女性に対する配慮のなせるわざではなかったか。

他にも、美奈和集（一八九二年）で、それまでにあった「我がかへる故郷は外交のいとぐち乱れて一行の主たる天方伯も・・・」の一節が削除されたことと、東亜版の比較にも興味をもたれる方がおられると思うが、東亜版にはこの節はない。ただ、この事をもって、初版にあったものが東亜版に出ていないので、やはり「船中稿」ではない、とは言い切れない。

何故ならば、東亜版が先にあり、鷗外はドイツ語版をもとに、あれこれ時代に合わせて日本文を創作し、筆を入れ続けたとみる前提に立てば、初版以降の改変作業に於ける、ドイツ語によって成った「船中稿」の存在はもはや薄くなってしまっていると考えられるからだ。

「舞姫は、なぜ書かれたのか？」なる永遠の疑問が、鷗外研究者たちの間にはあるという。

筆者の答えとしては、ドイツ語で書いた幻の私家版こそが、日本まで追っ

かけてはきたものの、結婚出来ずにドイツへ帰っていた恋人への渾身のメッセージであったのではなかろうか、というものである。とにかくは傷心のまま、帰国するしかなかった彼女に読ませたい一心で、まずはドイツ語で書いてみた・・そう考えると、多くの点で辻褄が合うようになるのだ。

諸説を見ても、鷗外がドイツ語版舞姫を初版・国民之友に先んじて作って、ドイツに送ったのではないか、という想定まではされてはいなかった。同様に、独語訳をエリーゼに送った可能性も論じられていないようである。

しかし、あれほどまでにドイツ語に堪能であった鷗外が、一八八九年前後の一時期だけ、北尾次郎とドイツ語のみで書かれた文藝雑誌を編集しており、片や北尾は、ドイツ語で自伝的メルヘンなどを創作し、誌上に連載しており、当然、鷗外にもドイツ語での小説執筆への誘い、期待はあったとみられる。

ドイツ語力には人一倍の自信をもっていた鷗外だけに、ドイツ人に負けない本場仕込みのドイツ語小説を書いて、バイリンガルなところを日本の文壇に見せつけ、名声を得ようと考えたとしても、本来不自然ではあるまい。

そこで生まれたのが、ドイツ語作品として誕生したであろう、東亜版"Die Tänzerin"であり、最終的にドイツ語ではなく、やはり多くの人に読まれうる日本語で発表することに方針転換したのであるならば、日本初の一人称小説で、翻訳調の雅文体や省筆、倒置法の使用など、「ドイツ語文体に習熟した人と見て取れる」(小堀桂一郎『森鷗外・シンポジウム日本文学』一〇六頁)とあるような、『舞姫』のもつ文体の疑問も解けるだろう。

とすると、東亜版は、まさに彼の個人的な思いを吐露した、心からの『舞姫』であり、より肉声に近い作品であったはずで、生涯にわたって、このドイツ語版からの推敲を密かに重ねたのではなかろうか。

以上、長谷川の船中稿の存在仮説に乗る形で、東亜版の検証を行ってみた。北尾次郎の作品が、『森の女神』のように手書きのドイツ語のままで、殆ど誰も読めないのとは対照的に、鷗外の日本語で『舞姫』を発表した判断は当たっていたことになる。北尾次郎の没後、春汀は、こう書き残している。

「若し彼（北尾次郎）にして独逸文ほどに日本文にも堪能であつたら、日本の文壇は、森鷗外氏以外に独逸文学系の一明星を添えたであらうといふものがある。」(鳥谷部春汀「北尾博士」『春汀全集』第三巻二〇〇頁一九〇九年、博文館)

補遺

なお、筆者としては、所謂「エリス問題」には言及するつもりはないが、関連文献を読むうちに、一八八八年九月、森鷗外の後を追って来日した、エリーゼが、なぜ五週間後に、おとなしく同じ船 General Werder 号で帰国の途に就いたのか、を巡って実に様々な議論があることを知った。

筆者にこの関心を抱かせたのは、小堀の「何故に、太田がエリスと正式に結婚して日本に連れ帰る、という結末が考えられなかったのか。(この問題を議題にかけては、もう文学研究の範囲をはみ出す。私には判断の材料が無い。青木公使の夫人がドイツ人だったこと、青山胤通と正式に結婚したがった一ドイツ少女のこと、長井長義が「挙止閑雅愛す可き」ドイツ少女と婚約したこと、(以下略))」(『若き日の鷗外』一九六九年、五二二頁)からであった。

(1)森鷗外が軍医として、外国人妻をもらうことには目に見えない障碍があり、用意された立身出世の道への妨げともなることが、この小説の背景にあったとされる一般的な見方を取るとしても、現実問題として、ドイツの若い女性が日本人の妻となり、生活していくことは、決して安易なことではなかった。

その最たる至近例が北尾家であり、北尾次郎の伝記関係では、桑原羊次郎が、妻ルイーゼは、足が不自由であるにもかかわらず、義足で槙割から水汲

みまで荒仕事を全てこなすのに親族も驚き、妻としてのドイツ人女性に感服する感想を残しているが、もし賀古らが、何とかエリーゼの熱情を冷まそうと考えたとするならば、北尾家訪問が最良の方法であったと考えられる。では北尾家訪問が現実に起きていたと仮定し、想像してみるとどうなるだろう。

九月のまだ残暑厳しき中、藪蚊の襲来（北尾次郎は蚊帳のなかで夜間研究を続けたという）を受けつつ、ベルリンでよく食べられるアイスバイン等でもてなされながら、エリーゼは、ルイーゼから何を感じ取ったであろうか。

北尾次郎とルイーゼは、妻がまだ幼い時からの出逢い、つき合いであった。森鷗外とエリーゼのカップルに比べれば遥かに深い縁である。東大教授の妻として、義足ながらも、子育てに励む異国の同胞の姿をみて、エリーゼが自分の愛の現実、結婚を強行した時の姿を知ったとみるべきではなかろうか。

エリーゼが、「踊もするけれど手藝が上手なので日本で自活して見る氣で、『御世話にならなければ好いでせう』といふから、『手先が器用な位でどうしてやれるものか』といふと、『まあ考えてみませう』といって別れたさうです。」と話していたことを、鷗外の妹・小金井喜美子が書き残している。

同じく、北尾次郎の妻は編物が得意で、成立学舎で教壇に立っていた時期もあったほどで、エリーゼの計画とやらも全く不可能な話ではなかった。

もしそうした話をルイーゼからエリーゼが聞けば、すぐには鷗外と結婚出来なくても、佳き日まで待つための方法を最初は想像したであろう。

具体的な日本での生活実態を、初来日したドイツ人に対しうまく説明できるのは、同じドイツ人同士であって、鷗外の弟や、妹の夫、小金井良精らが、ドイツ語で説明を尽くしても、日本人と結婚した先輩ドイツ人女性の語る言葉や実際の暮らしぶりの見学機会には、値千金の重みがあった筈で、在留ドイツ人からの説得こそが翻意の決め手となったであろう。鷗外の置かれた家庭環境や軍医としての仕事内容、軍医の収入で可能な生活レベル等は、日本で暮らす同じドイツ人から説明を受けるのが最適であって、これを小金井や賀古が試みなかったと考える方がむしろ不自然に思えるほどである。

(2)極めて高額であった、欧日間の船賃を誰が工面したかについても、議論があり、ユダヤ人富豪出自説も出されたほどである。

また、長谷川は、「エリスの来日は鷗外との結婚のためとか、鷗外との生活のためのみで来日したとも考えられないふしがある」（「森鷗外の『舞姫』の材源」一四八頁）とし、従来の結婚目的に絞った推理にも一石を投じていた。

他に仕事のアテがあったのではないのか、という指摘である。

確かに異人館の歴史を調べていくと、この疑問に参考となるであろう、当時の在留ドイツ人の生活実態を物語る事例がある。

例えば、当時の横浜や神戸の在留ドイツ人たちにとって、学齢期に達した子弟の教育は大問題で、ドイツ人学校も当時はまだ日本になかった。ドイツ人の親は、日本人の子守をつけると、日本語を先に覚えてしまい、ドイツ人として将来帰国して支障が生じることを第一に懸念した。日本経済の発展とともに、相対的にドイツ商人たちの日本における収入は低下し、昭和に入ると日本人のアマさんが乳母につくようになるが、明治時代は違っていた。

神戸北野の風見鶏の館を創建した、トーマス家の長女エルゼの回顧録では、彼女は七歳になったとき（一九〇六年か〇七年）有力商人たちが、ドイツから家庭教師の女性を連れてきて、何家族もの子どもたちが集められ、現在のフリースクールのように、自宅を教室にして、家庭教師がまとめて教えるといった方法が採られていた。もし、極東へはるばる出かけることを厭わず、ドイツ語で絵本を読み聞かせ、終日話しかけ、低学年の子供への簡単な授業ができる程度に知識教養のある未婚女性ならば、自分で旅費を負担しなくとも、来日出来る可能性は実際にあったのである。エルゼも、父親がハンブルグから連れてきた家庭教師に習った、と書き残している。（拙著『風見鶏謎解

きの旅』神戸新聞総合出版センター、二〇〇九年、一四四頁）

北尾次郎邸を借りて暮らしたデラランデも、乗っていた馬車が交通事故を起こし、人事不省に陥り、その際に妻と同乗の女性「家庭教師ショレル」がいて共に大怪我したことが一九一三年師走の朝日新聞記事からわかり、外国人住所録からも、東信濃町で同居していた家庭教師の存在が読み取れる。

鷗外がエリーゼの帰国を前に盟友・賀古鶴所に出した書簡に「其源之清カサルコト故」とある点については、エリーゼが日本に住むドイツ人商人等からの子守や家庭教師募集の応募に乗じて、船賃を負担させ、来日はしたものの、実際は鷗外との結婚交渉目的の渡航であったとなると、まず何よりも雇い主を騙したことになるわけで、その来日手段を「清カサルコト」と認識していたからではなかろうか。

もちろんそのまま、雇用主の指示通りに日本で勤務し、契約を履行し、日本に滞在し続ける方法もあったであろうが、それは森家の最も恐れるパターンであっただろう。林尚孝の「鷗外の帰国からエリーゼの離日まで　舞姫事件考　その八」（『鷗外』第八九号、二〇一一年）には、鷗外の実の妹の主人であり、東大医学部教授だった小金井良精日記の全文翻刻が掲載されている。その十月四日の項に「事敗ル丶直ニ帰宅」とあり、林は（エリーゼとの）「帰国交渉が失敗したことを明記している」と解釈している。この点はその他の研究者も殆ど同一見解であろう。しかし、具体的に何が問題で、どのように事敗れたのか、この小金井の書いた一言からでは誰も判らない。

もし、筆者が仮定したように、在留ドイツ人の家庭で働くことを約して、結婚目的を隠して来日した事情があったとすれば、残る問題は、雇用主との間に発生する違約金問題でしかない。契約通りに働かず、帰国するのであれば、船賃の賠償など、非常に高額な請求になっても不思議はない。エリーゼに資力がなければ、そのまま滞在するしかなく、一方、本来は紛争当事者ではないはずの森家がエリーゼの日本長期滞在を望まないのであれば、誰が違約金を負担すべきなのか、交渉は全く一筋縄では行かなくなってしまう。

小金井が「事敗ル丶」と、勝敗の「敗」を当てていることからも、結婚を諦めさせる交渉ではなく、百戦錬磨のドイツ人商人を相手に、何らかの金銭紛争の交渉事であったとすれば、また別の解釈も可能なのではなかろうか。

同様に「石黒忠悳日記」に関し、筆者が注目したのは、九月二十一日「森林太郎来ル旅費ノ事ヲ談ス」と同二四日「獨逸公使館ヲ森ト二人ニテ訪存ス」とある部分で、前者は鷗外と石黒の留学中の費用精算、後者は、留学時のドイツ政府の計らいへの謝意表明に出かけたと解釈するのが一般的であろう。だがここでも、エリーゼの違約金に絡む旅費問題、エリーゼの雇用主からのドイツ公使館への苦情があって、上官石黒を巻き込み、善処を約束させられる局面だったとみれば、石黒日記の意味は全く変わってくるであろう。

(3)舞姫公表当初から「まことの愛」を巡って、太田豊太郎にはそれがないことが、小説の重要な柱として論じられてきた。

これも現実に来日したエリーゼと北尾次郎夫妻との出会いがあり、実生活ありのままを見せられたと考えれば、自分たちの関係は、北尾次郎夫妻には遥かに及ばないと冷静に認識し、熱情も冷めざるを得なかったであろう。

更に、『独逸日記』に出てくる人名の多くは、北尾次郎の知人でもある。

青山胤通は北尾次郎の主治医であったし、桑原羊次郎の回顧録では、コレラ実態調査の報告書をドイツ語で書いたときには北尾次郎が校閲者にもなっていた。ヘルムホルツの下に北尾次郎と入れ替わるように学んだ田中正平、菊池大麓（東大理学部、北尾のライバル）、眼科医の梅錦之丞（松江藩藩医の息子、初代東大医学部眼科教授、北尾次郎とはベルリンでの記念写真あり）、志賀泰山（林学者、北尾の同僚で大学南校出身）、長井長義（薬学者、北尾次郎と同期の留学生で同じ下宿、生涯家族ぐるみで交際）など、知人交友関係

が深く重なっている。それだけに、彼らの間で、北尾次郎の結婚が話題とならなかったはずはない。鷗外は、一八八四年、留学出発前に、ベルリンの最新情報と紹介状などを求めて、帰国したばかりの北尾次郎夫妻と会った可能性も十分にある。また、長井長義が、結婚相手を連れに再度訪独した一八八六年の二月二〇日と二二日、鷗外は、長井と北尾次郎を我が子のように可愛がり、長井には強く縁談を薦め、結婚させたベルリンの下宿屋主人で貴族の「ラアゲルストリヨヲム」夫人宅を訪問している。そこでは当然、北尾次郎はどうしているか?という話題になり、北尾次郎の結婚についても盛んと語られたことであろう。こうした環境下で、鷗外は、長井のように、一旦帰国して親族を説得し、準備万端整えたうえで迎えに来る可能性を間近で見ていたわけでもあり、一方で、北尾次郎のように、親宛にはベルリンからの手紙一本だけで、結婚まで毅然と断行した例も目の当たりにしていた事になる。

いずれもドイツ人女性と結婚することへのハードルが、後の時代の国文学者が考えるよりも、当時はまだ低かったのではないか。

具体的な根拠はないが、もしエリーゼとラーガーシュトレーム夫人が知己であったならば一計を案じ、エリーゼに日本での子守や家庭教師の働き口を斡旋して、逡巡する鷗外に否やは言わせまい、とした可能性も考え得る。

独身であった夫人は、日本人下宿生たちを実の親のように親身に世話したことが、数えの九〇歳の誕生祝いの新聞記事にも書かれているし、仲人好きな女性にとっては十分にあり得ることだと考えられるからである。

まさか鷗外が帰りの船中、ドイツ船で追って来るエリーゼの影に悶々と過ごさねばならなくなるとは露知らずに・・・

となれば、喜美子のいう「(鷗外の)家の生活が豊かなように噂して唆す者」がベルリンに居た話とは、ひょっとしてラーガーシュトレーム夫人のことだったのか、とも思わずにはいられない。

北尾次郎挿絵作品に見る『舞姫』と、晩年の『妄想』への影響

北尾次郎が残したドイツ語長編小説『森の女神』には、膨大な量の挿絵が、次郎自身の手で描かれ、今に伝わっている。その絵は、西脇宏、猿田量、若林一弘らによると、必ずしも物語の進行と連動している挿絵ばかりではない、とのことで(「知られざる北尾次郎」『山陰地域研究(伝統文化)』第五号、六五頁、一九八九年)、よく見ると、小説『舞姫』の一情景を想像して、台所に座る舞姫を描いたのか、と思えるものもあった。(本稿一三二頁写真)

一緒にドイツ語雑誌を編集したという関係からみて、おそらく森鷗外は、北尾次郎からこの自作小説本を借りてむさぼるように読んだことであろう。画家・原田直次郎と鷗外の交友関係を見ても、北尾次郎に対してはドイツ文学者同士という関心に加え、挿絵作家としての興味もあったはずだからだ。

そして実際に、『東漸雑誌』の表紙画を北尾次郎に任せてもいる。

つまり、鷗外は北尾次郎の画家としての腕前を評価していたことにもなる。

『森の女神』の多くの挿絵が、筆者の見解では、宍道湖畔から嫁ヶ島を望む場所や嫁ヶ島上を想像しながら描かれたとみられる。本稿巻末カラー写真で例示している通り、松林の中にある質素な庵のような造りの空想上の建物が繰り返し描かれている。後年、鷗外が『妄想』で描き、実際に房総半島日在海岸に買い求めた別荘とも重なって見える。写真上の次郎の絵の如く、本棚には外国文学の本が並び、実験器具や天体観測望遠鏡があ

り、それでいて、製材すらしていない松を組んだだけの質素な茅葺きの家。
砂丘がどこまでも広がる松林の中に佇む終の住処を、鷗外もこれら次郎の絵から啓示を受け、人生の最後に日在海岸に造ったような気がしてならない。

「砂山の上に、ひよろひよろした赤松が簇がつて生えてゐる。余り年を経た松ではない。海を眺めてゐる白髪の主人は、此松の幾本かを切つて、松林の中へ嵌め込んだやうに立てた小家の一間に据わつてゐる。主人が元と世に立ち交つてゐる頃に、別荘の真似事のやうな心持で立てた此小家は、只二間と台所とから成り立つてゐる。今据わつてゐるのは、東の方一面に海を見晴らした、六畳の居間である。据わつてゐて見れば、砂山の岨が松の根に縦横に縫はれた、殆ど鉛直な、所々中窪に崩れた断面になつてゐるので、只果もない波だけが見えてゐるが、此山と海との間には、一筋の河水と一帯の中洲とがある。」（鷗外『妄想』）

そこはまた、北尾次郎が描いた、挿絵の家そっくりの情景描写でもある。ベルリン周辺での湖に囲まれた暮らしや文化を知り、帰朝後も長くドイツ語と生き、文学を友に過ごしたとしたならば、到達するであろう最後の理想郷が、ブランデンブルグの荒涼を愛したテオドール・フォンターネ（Theodor Fontane 一八一九～一八九八）的世界になっても不思議はないであろう。

明治二五年一月七日付読売新聞一面の記事から

「明治紳士ものがたり
○北尾次郎跛(ビッコ)の女(ヲンナ)を娶(メト)る
北尾次郎獨逸に遊び一女学生(ヂョガクセイ)と偕老(カイラウ)の約を結ぶ
約後に至り女階子段(ヂョハシゴダン)より落ち跛となる
女是れより深く次郎の愛を失はんことを憂ふ
而(シカ)して次郎却(カヘツ)て其の不遇を憐れみ益々鍾愛(ショウアイ)を加へ
遂に携(タヅサ)へて日本に歸(カヘ)る」

北尾次郎と妻の結婚について記した短い記事である。ちょうど北尾次郎の家が竣工したはずの年の正月のことだ。西暦ならば一八九二年になる。
『舞姫』を読んだ後で、この短い記事に接すると、鷗外とはまるで正反対の生き方であると同時に、もし小説家として北尾家を知れば、興味ある題材に映ったであろうことは間違いない。何より北尾次郎の記事の結末を逆にすれば、大まかな『舞姫』的悲劇の骨子が出来上がることに気付かされる。

結語にかえて

『舞姫』発表の前年、『東漸雑誌』に志を同じくして集った、北尾次郎と森鷗外。以後、二人の間はどうなったのだろうか。
僅かに内田魯庵が「鷗外先生の記憶」に斯く書き残すのみである。

「独逸といえば、或る時鷗外を尋ねると、近頃非常に忙がしいという。何で忙がしいかと訊くと、或る科学上の問題で北尾次郎と論争しているんで、その下調べに骨が折れるといった。その頃の日本の雑誌は専門のものも目次ぐらいは一と通り目を通していたが、鷗外と北尾氏との論争はドノ雑誌でも見なかったので、ドコの雑誌で発表しているかと訊くと、独逸の何とかいう学会の雑誌（今はその名を忘れた）でだといった。日本人同士が独逸の雑誌で論難するというは如何にも世界的で、これを以ても鷗外が論難好きで、シカモその志が決して区々日本の学界や文壇の小蝸殻(ショウカカク)に跼蹐(キョクセキ)しなかったのが証される。」